

## 斉藤牧場の山地酪農

斉藤 晶

斉藤牧場 旭川市神居町共栄488 〒070-8032

〈農事組合だより, 34巻3号, 10号, 1989

(北海道農業技術推進協議会) から抜粋〉

### 蹄耕法の「斉藤哲学を聞く」

#### 牛が暖房から雪おろしまでを

斉藤牧場にはいわゆる「牧場」らしい牛舎やサイロはない。第一牧場に100坪、第二牧場に80坪(廃置利用)の粗末なもののほか、野菜づくりに使うビニールハウスを改造した牛舎を使っている。牛は本来寒さに強く、牛舎がなくても育成可能であるという。言われてみれば当然のことだが、野生の牛は牛舎に住んでいた訳ではなく、雪が降っても雪の下になることはない。

60頭入る牛舎を建てるのに2,500万円もかける必要はないのだが、多くの酪農家は立派な牛舎を建てている。斉藤さんに言わせれば「搾乳をする時などに雨や雪をしのげれば要足りなのだから、ビニールハウスで立派に役立っている。これなら60頭入るようにしても50万円でできる」とのこと。

しかし、積雪寒冷の北海道で、除雪や暖房はどうするのか、1メートルも降り積もる雪ではつぶされてしまうのではないかと案ずる向きもあるのか。だが、案ずるよりも産むは易とか。牛の体温でビニールハウス内の温度は適度に保たれ、積もる雪はビニールを滑り落ちるから、牛は暖房と雪おろしもやってくれるというわけである。

#### 牛の出来ないことだけ人間が

斉藤牧場は傾斜度15度以上の土地が40%も占めており、重粘土地のうえ直径50センチ~1メートルの石が至るところに埋もれている。密生した笹と植木に火を入れて、不完全に焼き払った後、牧

草の種子をまいて、牛を放牧する。火入れのあとに生えるササ、野草の若芽を牛が食べる。牛の蹄(ひづめ)は牧草の種を踏んで土に埋めこむから、ササや野草は次第に姿を消し、牧草が成長する。3年後に牧草が80%、4年後には完全な草地に変わる。

傾斜の急な山地には機械も入らないし、自家労働力に限りがある。この山の働き手は牛であり、草地の造成も種子まき、肥料まき、収穫など主なものはみんな牛がやってくれる。「牛の出来ないことだけ人間がやるのです」と斉藤さんは言う。

#### 牛は牛なりにのびのび育つ

斉藤さんは「生態系」のバランスと変化に注目している。たとえば、草地と牛の数のバランスだが、時に裸地ができて、やや過放牧になるぐらいの方が雑草の過繁地をつくるより、草地の維持管理にはよいという。また、牛による草地造成の過程では、放牧地の状況とそこに入る牛の頭数を調整するのがコツだとも言っている。

山地では牛の運動量が大きくなり、当然エネルギー消費も大きいと考えられる。だから多くの専門家は、与えた資料の量に比べて乳量が少なく、効率が悪くなるというが、実際の調査によると思いがけない事実が出てきた。

斉藤牧場の牛を一年がかりで調査した高知大学の青木博士は「牛の鼓動を測定すると、牛が山の上まで急傾斜地を歩き回って登っていくが、心拍には大した影響もないし、疲労の跡も見られない。育成過程で傾斜地に馴れた牛は体力もついており、エネルギー消費は舎飼の牛より少なく、何よ

りも消化機能が丈夫である」という。

雪どけとともに放牧が始まるが、牛は朝牛舎を出て、山頂に至り、夕刻には牛舎に帰る。その間山地を歩き回り、草を食べ、施肥をしながら、消化吸収しつつ、乳をつくる。すべては牛群の自主的な管理で、人間があれこれと世話をするわけではなく、搾乳の仕事だけである。

舎飼経営の発想では思いもつかない放牧経営のおもしろさがある。

そうした牛の特性を引き出し、活用するためには、やはり自分の山地に合った牛を育てることだ。その牛はなにも高級な牛でなくても結構だ。むしろ雑種で丈夫な牛がよい。どんな山に放されても、自分で草を探して食べる。こうした環境にあらかじめ馴らしていく必要がある。

### 〈GLASS FARMING Vol.3 1998

(創地農業21) から抜粋)

#### 「庄司昭夫VS齊藤晶 ヒューマントーク」

**庄司** 自然の中に身をおき、自然をよく観察することで齊藤さんはある時、ハッと気づいたということですが、自然農法の福岡正信さんや、小麦王と呼ばれた故勝部徳太郎もそうですが、農業で素晴らしく成功されている方って、観察力がずば抜けていらつしやいますね。

**齊藤** まさにその観察力、そして感性ですよ。鋭い感性と観察力を持っていれば人が気づかないものでも気づいてくるんです。すると行きづまりなんてないはずなんです。それが自然の理にかなまって循環の法則にワッと合わせれば、あとは放っておいてもいいはずなんです。それと、直感力。これは人間みな持っているはずなんです。ところがあまり勉強し過ぎると直感力が麻痺してくると思うんです。だから私は皆に、あまり勉強するのも善し悪しだよと言ってるんですよ。

乳ばなれ直後の子牛を買ってきて牛舎に入れない。いくら発育が悪くても濃厚飼料は与えない。そうすれば牛も動物だから餌が無ければなんでも食べる。本来、牛の中に眠っている「野性」を引き出し、よみがえらせることで、牛を山の環境に順応させるのである。それによって、草地を100%活用することもできるし、牛の自活力を培うことで、牛は牛なりに土地や草の状況を覚えて、のびのびと育つようになる。

学校で勉強して知識を広くすることは必要だけれども、それにこだわり過ぎると肝心なものが見えなくなってしまうんです。知っていることしか見えなくなるんです。そうすると私らがやっている事は、あんなもの原始的で値打ちがない、と言う事になってしまうんです。

**庄司** 教育というのは、何をどう覚えたかではなく、どんな人間になったかだと思います。だいたい12年間の学業って、丸暗記してもわずかにICチップ1枚分でしかないそうです。齊藤さんを見ると、ここが学校なんですね。まさに自然が学校ですね。

**齊藤** 人間の知識なんて自然から見たら知れてますよね。その辺をもっと意識しないといけないんだよね。だから自分がこれを一つの生き甲斐にしようと思つたら、それは勉強しろと言われてなくても勉強するんです。だから何もそんなに知識を詰め込む必要がない。詰め込んだために、ひずみの方が大きく出る事があるんです。だから大学であ



まり勉強し過ぎると山が見えなくなっちゃうよ、と私は言ってるんですが。

**庄司** 斉藤さんは私たちが今グラスファームリングスクールで世界的科学者から学んでいることをもう何年も前から実践されている。しかも昨年までニュージーランドを訪れる事なしに。

**斉藤** 20年程前にニュージーランドからロックハートという先生がここに来たことがあります。その時はまだ草も半分くらいで牧場らしくもなかったんですが、これは素晴らしい事だから行政も農協も普及所も一切斉藤牧場には口出すなよ、この人は好きなようにやらせても絶対大丈夫だよ、と言ってくれました。すると道庁がびつくりして調査員をよこし、「蹄耕法」なんていう名前がついた。人間、極限状態までいったら出てくるものがあるんです。だから素直に謙虚に自分を詰めていく事じゃないかな。そうすると、それまで無駄だと思っただけで気づけなかったことが今度はどんどんと見えてきて、今では無駄なもの一つもないという事に気がついてくるでしょう。

**庄司** 本当ですね。崖つぶちに立たないと知恵は出てきませんね。それと考え方ですね。商業界でも教えられました。不景気っていうのはあんたの頭の中だけだ、ってよく言われるんです。一番最悪なのは経営者自らが不景気面することだと。不景気な時ほど良い店とダメな店の差が出てくる。しっかりしている所にお客は殺到する。不景気というのは言い訳にしかならないですね。

**斉藤** その通り、自分が出来ない理由を集めて一生懸命主張する人がいますね。社会の状態が悪いからダメなんだ、行政がダメなんだ、時には天気が悪いからダメなんだまでいってしまう。それはやはり自分の捉え方の問題で、自分の気づき方が足りないだけの話なんです。

**庄司** 手作りするという事はコストがかからない。商業の世界ではそういった素晴らしい人達の経験法則を伝える手段が整理されている。それを農業の世界に置き換えてみると、ここ斉藤牧場に立派なモデルがあると思うんです。なのに、どうして今まで皆もつと注目しなかったのか。

**斉藤** これまで何度もいろいろな普及所の人達がここで研修していきましたが、残念ながら本当に理解している人は誰もいなかったんです。だから未だに近代化を叫んでいる。しかしその答えはもう出てきているわけです。21世紀は日本の大和をもう一度見直す時です。その具体例を私どもが作っておかなければならない、そんな使命があるんだなと思うんです。



**庄司** 昨年、小谷社長とエリック博士と一緒にアルゼンチンに行った時に感動したのは、牧場1牧区にフクロウが2羽ぐらいいるんです。そういった猛禽類がいるという事は、そのエサとなっているミミズや小さな虫もたくさんいるという事なんです。農業において生態系を大事にするという思いは平均的な日本の農家よりあるようですね。一方、日本で莫大な設備投資を必要とするフリース

トールをやって大成功を納めた事例というのはあるんでしょうか。

**斉藤** それはほとんどアメリカの真似ですからね。やっぱり日本人の畜産をあみ出さないとだめなんだよね。違った風土の中で上つ面ばかりマネたってだめなんです。日本はお米の民族ですから、田んぼ作りは上手いけれど、畜産においてはまだまだ幼稚なもの。

**庄司** まさに日本の畜産はアメリカの余剰穀物対策の戦略に乗せられた訳です。穀物が余ったから日本に売ってしまおうという戦略に。あれはまさに鶏でいうブロイラーですね。しかも台所とトイレと寝室が一つになったとんでもない環境です。よく鶏の卵でも水っぽい卵がありますが、あれは餌のせいでも何でもなく、ストレスからくるものなんです。狭くて決して衛生的とは言えない場所に詰め込まれているとストレスから大体8割は病気だと言われています。すると牛でも、密飼しているものと自然の中に飼っているものでは同じ牛乳でも内容は違うという評価をこれからもっとしていかななくてはなりませんね。現に鶏では放し飼いとブロイラーの違いはすでに評価されていますから。

**斉藤** まともじゃないことを続けていけば必ず最後には何かひずみが出てきて人間が健康を害するんです。鶏も牛も人間も皆健康になっていく要素を組み合わせなければだめなんだよね。

**庄司** 何だか頭のいい人達がこぞって間違った状態を作ってしまう、今はその逆転現象がまさに始まろうとしているんじゃないですか。

**斉藤** 同じ常識でも勘違いという常識がたくさんあるんです。ところが皆気がつかない。気がつくともしないんです。常識通りに固定観念に基づいて作っている。本当はそれをひっくり返さないとだめなんだよ。そうすると今まで気づかなかった素晴らしいものが見えてくる。例えば、日本の山にハゲ山はないんだから、山自体にもともと飼

料があつたんじゃないかと気がつかなければいけないと思うんです。それを草地造成だなんだって山地をたたき落とすなんて、とんでもない。笹だつて新芽なら牛は喜んで食べるし、秋になって寒くなって草の成長が止まるとまたその笹を食べて行く。だから笹だつて立派な牧草なんです。うちは牛が食べるのは皆牧草なんだよって教えています。たんぼぼだつて牧草だよ。今はたんぼぼがきれいに咲いているから、今の時期は「たんぼぼ牛乳」って言って出せばいいんです。



**庄司** 雑草のとらえ方も国によって違うらしく、日本人が雑草とうのは、お米にとって邪魔なものを雑草と言ひ、イギリス人にとっての雑草とは羊の餌にとって邪魔なものを雑草と言うらしいですね。

**斉藤** そうです。その点牛はほとんど何でも食べてくれるんです。雑草ぐらいなものですよ、残すのは。だから日本の山は宝物なんです。今行政は中山間地域の問題を抱えて困っているようですが、ちょっと発想を変えたら中山間地域なんて素晴らしく変わるんです。問題点なんかありません。それにいかに気づくかなんです。山の草地化なんて本当にやろうと思つたら1年で立派にできます。去年種を蒔いた草地が山の上にありますよ、もう立派な草地になっていますよ。確かにここは地形は悪いけど恵まれていますよ。夜になると夜景がとってもきれいでね。昼だつて、私は宣伝していないのいつの間にか旭川の観光ガイドブックに載

つちやって、たくさんの人が山菜採りに来たり、ピクニックに来たり、音楽会を開いたり、どんどん町から人がやってきますよ。

庄司 それにしても見事に管理されたきれいな草地ですね。糞尿なんかありませんね。

斉藤 普通よその牧場では糞した所の草は食べ残すんですが、ところがうちは食べ残しが一つもないんです。だからそれだけうちの牛はいいやしいといえはいやしいのかもしれないんですがね（笑）。

庄司 よーく見るとそこの木の下に糞があります。すでに腐葉土になってしまっただけ糞という感覚ではないですね。よつぽど土に消化力があるんですね。

斉藤 全部牛任せだけこういう管理になっているということ。いつも言うんですが、人間より牛の方が山の管理はずっと上手いんですよ。

庄司 でも開拓で入った頃は大変だったでしょう？

斉藤 そう、ブドウづる、マタタビのつるがひっかかって人間なんて歩いてこれなかった。笹だつて人間より背が高い。雑穀をつくっても周りからネズミやウサギがやってきて人間よりも先に食べてしまうんです。そこで最初に行きづまりましたね。その時、山の木によじ登ってずっと考えてたんです。どうしてこんなに汗水垂らして働いているのにうまくいかないんだろう、どうして山に棲む鶏や昆虫は働きもしないのに木や草と一緒に悠々と暮らしているんだろうって。でね、そうか！自分もネズミやウサギの仲間入りをしよう！という事になったんです。そこにあるものを生かせという事になったんです。でこういうふうなことになってしまったという事なんです。ただね、昔はよく町の人に、朝から晩まで働いて何のために生きてるんだ、と言われた事もありますよ。でもね、そんな時はあんた達こそ虫も住めないような所に住んで何言ってるんだってね。

